

「鎌足桜の魅力」写真と短歌・俳句コンテスト審査講評

## <写真の部> 木 島 衛

今年のコンテストは7回目となりますが、桜の花の咲くころに新型コロナウイルスの緊急事態宣言が出され、外出自粛が求められた時期でもあり、応募数が昨年を下回る結果となり、大変残念に思っています。

応募された皆さんは、新型コロナウイルス禍の中、密を避けながら作品作りの為に奔走されたことと思います。

審査は例年ですと審査員全員の投票により選出していましたが、今回は新型コロナウイルス過の中での審査となりましたので、私の方で写真の種類やバランス等を考慮し上位2点、入選7点、佳作2点を選び、実行委員会、役員会を経て賞が決定しました。

選ばれた作品は、どれも素晴らしい作品でしたが、その中で春川修夫さんの「早春」を最優秀賞の鎌足桜保存会 会長賞に、また倉園博志さんの「華かご」を優秀賞の新千葉新聞社社長賞に選出いたしました。

最優秀賞の春川修夫さんの「早春」という作品は、鎌足さくら公園の桜ですが、青い空と白い雲の調和がとても良く、それが手前のピンク色の桜を引き立てています。また、奥の模型飛行機を飛ばして遊んでいる若者の動きや、白い飛行機を林の木（濃い緑）の中に入れ、飛び上がる飛行機を目立つように工夫しています。花の数も桜の木に対して丁度いい数だったと思います。静の中に動を感じる素晴らしい作品です。

次に優秀賞の倉園さんの「華かご」という作品ですが、鎌足桜をアップにして桜も空もどちらも薄い色でありながら、とてもバランスのとれた色合いで印象に残る作品となりました。タイトルの「華かご」もこの作品にぴったりで、この華かごを持ってピクニックに行きたい気分になる様な素晴らしい作品です。

この他に入選7作品、佳作2作品が選ばれていますが、紙面の関係で割愛させていただきます。

このコンテストは、被写体が鎌足桜だけですから、どうしても同じような作品が出来上がってしまいます。ただ、そんな状況の中でも毎年上位となる作品は、何気なく見過ごしてしまう桜の姿、色合いそして、周りの情景をとても上手に表現しています。もちろん技術的な部分も大切ですが、まずは鎌足桜の咲く姿に心を寄せてみてはどうでしょうか。

## <短歌の部> 鈴木 眞 澄

短歌の部では39首の作品をご応募いただきました。

今年は、コロナ禍の中、外出自粛と桜の開花時期が重なって昨年度をだいぶ下回る応募数となってしまいました。

しかし、作品は例年と変わらず手堅いレベルの歌が多く寄せられました。おだやかに過ぎた前年までとは異なり、今の社会状況を反映した歌が幾首もありました。これは、特異なこの年を象徴するものとしてカレンダーにも反映されてゆくのが自然だろうと考えました。また、歌にも良いものがありました。そして、次のような結果になりました。

### 鎌足桜保存会会長賞、鈴木早苗さんの作品

#### ○ 外出自粛の人なき山里静まりてさくらに雨の滴のひかる

この歌では、「外出自粛」ということがその時の作者の心を一番に占めていたのでしょう。それが最初に出ていて読む側にその思いがストレートに伝わってきます。人のいない静まり返った山里に、雨あとのさくらをひとり見あげている作者が浮かびます。「さくらに雨の滴のひかる」にさくらの美しさ、すがすがしさが感じられて良いと思います。

### 鎌足公民館館長賞、久富としさんの作品

#### ○ やうやくに花房ほぐれ咲きそむる鎌足ざくら雉子なく里に

この歌は、ひとつひとつの言葉が響きあって、調べの良い一首となっています。上の句のていねいなもの見方と表現が良く、下の句の「雉子なく里」が一首の詩情を深くしています。ようやくほぐれはじめたさくらの下に立つ作者と、鎌足の里の静かな様子がこころなつかしい感じで伝わってきます。

その他、入選7首、佳作2首でした。

どの歌からも、外出自粛の日々のうちにためらいながらも、鎌足の里に足を運んでくださり、無心に咲くさくらの花を詠まれたことが感じられまして、そのうちの一人である私も、とても親しく嬉しく思いました。

今年の作品展示は木更津市役所朝日庁舎とのことですので、気軽に多くの方々にご覧いただけるかと思っております。

## <俳句の部> 川 合 憲 子

俳句の部は一般が72句の応募でした。昨年が153句でしたので約半分です。新型コロナウイルスの影響があったと思いますが、内容は昨年に劣ることなく、少数精鋭の感がありました。

「コロナ」の名前が踊るような新聞の見出し的な句が多く出て来ることを心配したのですが、常識的な報告句はなく、そこに「詩」があり、自分に引き付けて詠んだ句に好感が持てました。

地元の鎌足中学校も24句の応募があり、昨年と同じくそのうちの2句を佳作としました。

審査をするとき①まず景がよく見える句、②どこか表現に工夫のあることを観点とし、今年は入選を昨年より減らし、6位までとしてあります。

### ○ 鎌足桜保存会会長賞 〈 里山のせせらぎ光る八重桜 瀬川泰行 〉

印象鮮明な句。きらきら光る小流れが気持ちよく心に響き、美しい鎌足桜の咲く静かな里山が見えます。里山の「さ」とせせらぎの「せ」のサ行の音がリズムカルです。

### ○ 鎌足地区区長会会長賞 〈 八重桜咲くや三十番札所 吉田洋子 〉

すっきり、はっきり、余分なことは一つも言っていない。調子がよく感じるのは、咲くの「さ」と三十番の「さ」これもサ行の音です。破調もいいですね。

### 3位 〈 鎌足の風となりけりうす桜 中村 瞳 〉

「鎌足の風となりけり」、この切り口が上手で、心地よい風を感じます。

### 4位 〈 休校の校舎見守る八重桜 吉田暁美 〉

これは今年の桜です。コロナという言葉を使わずに、「休校の校舎」を見守っている鎌足桜がとても素敵です。作者も見守っています。

### 5位 〈 八重桜こもれび揺れる鐘撞堂 黒須敏夫 〉

「こもれび揺れる」という細やかな表現、1位の作品と同じく今年は男性陣が頑張りました。

### 6位 〈 ゆるやかに葉風に揺るる里桜 高橋正子 〉

この句も心地よく響きます。作者は無意識かもしれませんが、「ゆるやか」と「揺るる」の音が気持ちよいのです。

### 佳作 〈 自粛中知らずいつもの桜かな 川上佑樹 〉

「いつもの桜」がいいですね。私たちを取り巻く自然を、鎌足桜を大切にしたいですね。

### 佳作 〈 咲きほこる桜窓ごし揺れている 大岩璃子 〉

教室の窓からの桜でしょうか。中学生の作者の心も少し揺れています。

最後に私の拙句

### 〈 山里の風のやすらぎ余花残花 川合憲子 〉

5月2日、今年は新型コロナウイルスの影響でなかなか外出できず、半ば諦めていましたが、高倉観音堂の裏で まだ残っていた枝先の数輪の鎌足桜に出会えました。

句の作り方は人それぞれ違うと思いますが、私はその現場に行き、その雰囲気の中で作ります。来年はどんな鎌足桜に出会えるか、今から楽しみです。ありがとうございました。